

■洞薬会（北九州地区勤務薬剤師会） 5月度学術講演会
（2014/5/15, 18:30～, 会場；ステーションホテル小倉 5階 飛翔の間）

「 抗凝固療法の最近の知見 」

北九州総合病院 循環器内科部長 近藤 克洋 先生

【講演要旨】

近年、日本では、高齢化、食生活や生活環境の変化などにより、血栓症患者が急激に増加している。血栓症は、心筋梗塞、狭心症などの動脈血栓症と、静脈における鬱血や血流停滞、手術時の組織傷害などで形成される病的血栓による静脈血栓症に大別される。

血栓形成の原因には、血管内における①血流の異常、②血管内壁の異常、③血液成分の異常、が3要因として知られており（Virchow's triad）、これらは血栓症の病態解明や診断・治療・予防法の開発において重要である。

静脈血栓症の治療や予防に用いる抗凝固薬には、従来ワルファリンが広く用いられてきたが、近年、トロンビンや Xa 因子を直接阻害し、ワルファリンと比較して高い抗血栓効果と低い出血性副作用を示す新規経口抗凝固薬が開発され、非弁膜症性心房細動 や術後の深部静脈血栓症、肺血栓塞栓症の治療と予防に用いられるようになった。

本講演では、血液凝固機序、抗凝固薬の開発の歴史、そして新規経口抗凝固薬の特徴と課題について概説する。